

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

フロリーがガンブラを作るようです

【作者名】

明石明

【あらすじ】

警告！

この作品のフロリーたちは作者が昔考えて技術的に作れなかったMADを元にしています。

キャラ崩壊やありえない展開がごろごろしていますので、読む際はネタと割り切ってください。

どこかで読んだSSに似ているかも知れませんが、映像でない都合上、展開が似てしまうのはご容赦ください。

第1話「お買い物」

新惑星ベジータに宮殿を建てることなく地球へ移住したブロリーとパラガスの親子。

彼らは同じサイヤ人のよしみでベジータに紹介してもらった西の都のマンションで自由気ままな生活を送っていた。パラガスによる復讐？ そのようなものがあるはずがございません。

そんなある日、暇を持て余したブロリーはいつものように父親であるパラガスの部屋を訪れようとしていた。

「親父い。暇だからなんか面白いゲームかなんか貸してて、へあっ!？」

部屋に入るなり目に飛び込んできたのは顔に透明なゴーグルとマスクを装着しビニール手袋とエアブラシを装備した親父いことパラガスだった。

さらに部屋からは喚起が不十分なのかシンナーの臭いが残っており、人体にとっても非常によくはない空間となっていた。

「うん？ ブロリー、一体どうしたというのだ？」

「親父い。部屋臭いけどなにやってるんですかあ？」

「腐 腐。ガンプラで御座います」

「ガンプラってなんだあ？」

「えっ!？ ガンプラを知らないというのか？」

「はい」

無邪気なその一言がパラガスに言いよつのない衝撃を与える。

地球に移住するなり一緒にファーストガンダムから最新のビルドファイターズ、果てにはSDガンダムまで共に観賞したというのにガンプラの存在を彼は知らなかったのだ。

しかもパラガスが一度買い物に出ればかなりの確率でガンプラを調達しているにもかかわらず、ブローリー自身はそれにまったく気付いていなかったのだ。逆に食料を調達してきたときは一瞬にして気付くのだが。

「ガンプラというのはだな、お前も観賞したガンダムたちを題材にしたプラモデルを指すのだ」

「何い!? ということは俺のお気に入りジ・Oやメツサーラも……!?!」

「その通りで御座います。そして」

パラガスは身に付けていたマスクやゴーグルを外し、ガンプラが陳列されている棚から一つを取り出す。

「これこそ、私のお気に入りのオリジナルガンプラ。その名も……伝説の超ゴッドパラダムというわけだあ!」

取り出されたのは1/100スケールマスターグレードゴッドガンダムハイパーモード（金メッキ処理済み）。しかしその顔は紛れもなくパラガスだった。

「キメエー！ けど親父すこいです」

ビジュアル的には確かに気持ち悪かったが、無駄に精巧に作られた

その顔は（技術的にみれば）賞賛に値するものであった。

「ブロリーもガンプラ作りたいです。親父い、何処で買えますか？」

「腐 腐。その気になったようだな。いいぞお！ 私についてきなさい」

そうして連れてこられたのは西の都でも有数の大きさを誇る家電量販店 『Saiyashin』だ。

「親父い……。」「電気屋ですよ」

「心配することはない。最近の家電量販店ではガンプラを定価の30%引きで取り扱っているところが多いのだからな。さっ、模型コーナーはこっちだ」

パラガスに連れてこられたのは『子供王国』と銘が打たれたおもちゃやゲームを扱うエリアだ。その中でも奥のほうに向かえば、ブロリーにも見知ったシルエットが見え始めた」

「よくみる、西の都でもこんなにガンプラが揃ってる店は見られんぞ」

「な、なんて量だ……。！ 多すぎて迷いそうです」

「ブロリー。そういう時は自分の一番お気に入りの機体を探すのだ。お前はジ・Oやメッサラが好きなんだろ？ ならばそれを組みいいだけなのだからな」

「さすが親父ですよー！ じゃ、早速」

そういつて目的のガンプラを捜し求めガンプラコーナーを駆け巡

るブロリー。するとひととき大きな箱に黄色い機体があることに気付いた。

「フッフッ！ 親父い、見つけました！」

「ああ、そうか……って、~~ええええ~~!? マスターグレードだど!? やめるブロリー！ お前のパワー（技術）ではそれはまだ早すぎるー！」

「やってみなくちゃわからないですよ」

「……では、中身をよく見る」

店員に頼んで箱の中身を確認させてもらうようお願いするパラガス。

そして開けられた箱の中身はブロリーの想像を絶するものであった。

「へあっ!? なんだこのパーツの量は!？」

「これでわかったか。ハイグレードも組んだことのないお前がマスターグレードに挑むなどと、SEEDでいうならサイがキラに挑むようなものだということだ」

「そうですか……。ジ・Oが欲しかったですが、がっかりです」

心底残念そうにするブロリーだが、パラガスはお決まりのように「腐 腐」と声を上げる。

「心配することはない。ハイグレードにもジ・Oはあるのだからなあ」

「マジですか!？」

「ハイグレードのZガンダムコーナーをよくみる」

ハイグレードが陳列されているコーナーに案内されてみれば、確かにハイグレードには大きな箱のジ・Oが鎮座していた。

「イエー！ さっさと会計を済ませて作ロツトオオオ!!」

「待てブロリー！ いい機会だから他のガンプラを見ていくのだ。眺めるだけでも楽しいぞ」

「そうですか？ 親父が言うなら見てみよつと」

ジ・Oを掲げてテンションが上がりまくったブロリーだが、パラガスの言葉を聞き一緒になって眺めることに。

「親父い。さっきから気になってるんですがハイグレードやマスターグレードってなんですかあ？」

「ガンプラの目安のようなものだ。作りやすさを重視したハイグレード(HG)、ギミックを追求したマスターグレード(MG)。究極のガンプラを目指したパーフェクトグレード(PG)。そしてハイグレードと同じ大きさでありながらクオリティを追求したリアルグレード(RG)などがあるのだ」

コーナーに移るたびに説明するパラガス。そのひとつひとつを聞きながら箱を眺めているブロリーは目を輝かせていた。

「うん？ パラガス、ブロリー。来てたのか」

名前を呼ばれて振り返ってみれば、大量のガンプラをカートに突っ

込んだベジータがいた。

「よ、ベジータもガンプラですか？」

「貴様も作るみたいだな。ふむ、ハイグレードのジ・Oか。悪くはないチヨイスだが、俺のGP01の敵じゃあない」

「聞き捨てならねえな、ベジータ。俺のガンダムの方が上に決まってるぜ」

現れたのはマスターグレード ガンダム(Ver・Ka)を手にしたヤムチャだった。

「ふざけるな。俺たちのゼロが上に決まってる」

さらに現れたのはパーフェクトグレードのウイングガンダムゼロカスタムを担いだ人造人間16号とあの世からHGACのウイングガンダムゼロを買いに来たパイカーハンだ。

「おいおい、俺のヘビィアームズをのけ者にするとは許しがたいな」

今度はマスターグレードのガンダムヘビィアームズ(EW版)をもった人造人間17号が……。

「かつてVSシリーズにも参戦したガンキャノンを忘れるとは許し難いな」

続けてハイグレードとマスターグレードのガンキャノンを携えたピッコロが……。

「戦艦の魅力がわからないのか？ だとすれば気功砲を撃たざるを得

ない」

さらに1/1700スケールのホワイトベースを持った天津飯が
……………。

「……………ブロリー、帰るぞ」

「……………はい」

カオスとなってきた店内から目を背けるように、ブロリーとパラガスはさっさと会計を済ませて店を後にするのだった。

第2話「パラガスのガン普拉指南 その1」

「そあ作ロットオ　　ッー」

帰宅するなり早速ガン普拉の箱を開封するブロリー。

店で確認したマスターグレードほどではないが迫力あるパーツがいくつかもあり、一番底に収まっていた説明書には綺麗な塗装までされた完成図が映し出されていた。

「……ん？」

しかしそこでブロリーは気付いた。

そう、見本の写真は塗装されているのだ。目の前のランナー（1）に繋がれたままの実物と違い販売用に作られたため当然のだが、それを知らないブロリーは首を傾げるだけだった。

「親父い。写真と本物がだいぶ違います」

「当然だ。ハイグレードは作りやすさを重視しているのだからな。色が足りない部分は自分で塗る必要がある」

「なるほど。俺にも出来るといいなあ……」

「ブロリー。初心者のお前はまず組み立てるところから始めるんだ。塗装のテクニクは後でじっくり調教……ではなく、教えてやる。さ、私の道具を使っていいぞおー」

自分の部屋から持ってきたニッパーやデザインナイフ、墨入れ用のペンを広げるパラガス。

「まずは必要なパーツが全て揃っているか説明書を参考に調べるのだ。まずありえないだろうが、パーツが足りていないとなれば店へ知らせる必要がある」

「メーカーを血祭るためですね、わかります」

(いや、そのりくつはおかしい……)

まったく違う解釈をしたブロリーは説明書の通りにランナーやシールが揃っていることを確認する。

いよいよ作るのだと思うと彼の気は自然と高まってきた。

「ではブロリー。まずは説明書の通りに組み立てるのだ。大体のガンブラは胴体から入り頭部、両腕、両足、腰、バックパックや付属装備へと繋がっていく。自分が作りたい場所からかかってもいいが、今回は説明書どおりに組むぞ」

「はい」

ニッパーをガシツとつかみ、説明書に記されたパーツをパラガス監修の元、ランナーから切り離す。ただし、あとで綺麗に処理するため密着してきめるのではなく若干ゲート跡(2)を残してである。

「へあっ!? なんて切れ味だ……!」

「腐 腐。最高級アルティメットニッパーのパワーはいかがかな？」

次は切り取ったパーツに残ったゲート跡を処理するためこいつを使うのだ」

ブロリーに真新しい刃が付けられたデザインナイフを手渡し、パラガスは予備のナイフで自分の作りかけのガンブラを使って実演をし

て見せる。

「このようにゲート跡を処理するが、こいつの切れ味は非常に強い。慎重にゲート跡を削らねば、ガンプラはもちろん、自分の手までも破壊し尽くしてしまふ。力加減に気をつけてな」

「はい、頑張ります」

アドバイスを受けてさっそくナイフを構え、ゲート跡を睨む。そして

カッ！

「でやあ!!」

目を見開いて掛け声とともに一気に刃を走らせる！

ゲート跡はナイフの切れ味とブローリーのパワーによって切り飛ばされ、パーツは見事に綺麗なラインを手に入れた。

スパッ

「……………あっ」

だが、勢いよく走らされたナイフの刃は止まることなく、そのままパラガスの手にあったパーツ（RGウイングガンダムゼロEWのアンテナ）までも真っ二つにした。

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が流れ、ブロリーは冷や汗をかきながら場を和ませようと口を開く。

「……テへ、やっちゃったZ E」

「……………」

バウン!!

怒りと悲しみが臨界突破し、パラガスは超サイヤ人へと変貌した!

「ま、待て! 話せばわかる! 交渉を!!」

くパラガス号泣中 もうしばらくお待ち下さい!く

「改めて教えるぞ、ブロリー。パーツを切るときは、力を込め過ぎず慎重にだ」

「は、はい……」

パラガスのガン泣きによって揺れに揺れた部屋は、まるで地震でも起こったかのような惨状となっていた。

ひとまず部屋の状態をまるでビデオを巻き戻したかのように元通りに戻し、綺麗になったところで再び作業を再開。

「次はこのペンを使ってモールド(3)に色を付ける作業だ。はみ出た場所はティッシュや綿棒、汚れてもいいタオルなどで拭き上げるのだ。もし乾いてしまっても塗装用のうすめ液を使えばすぐ落ちる」

「なるほど。」

「いつですかあ？」

細い溝にペンを這わせて線を引く。色が付けられたことでメリハリが出てのっぺりとした部分が本物のようにリアリティを増した。

「フッフ！ カッコよくなりました！」

「いいぞお！ このまま説明書通りにDON DON組み上げて
ピンポン うん？」

テンションが上がってきたパラガスの水を差すように鳴り響くインターホン。

誰が来たのか確認すべくパラガスは来客カメラをタッチする。

『よっ、パラガス。オラ腹減っちゃったあ……食いもんくれ！』

何故かいきなり食事を求めてきた来客者は、ブローリーと因縁深いカロットこと孫悟空だった。